

くものいと No.25

KU MO NO I TO

1999 January 10

関西クモ研究会
大阪府茨木市

くものいと25号目次

梶元敏也：「蜘蛛の切手」紹介	1
西川喜朗：吉住氏採集の大阪府枚方市のクモ	5
長谷川夕希子：タランチュラの飼育	7
船曳和代：姫路市青山でマメイタイセキグモ、カトウツケオグモを採集	9
田中穂積：関西クモ研究会採集会の報告	11
牧野達也：蜘蛛礁計画	12
関西クモ研究会例会の記録	21
細田みどり：プレシンポと私	26
新海 明：広島県福山市と尾道市のクモ	27
渡辺 健：ウズグモ研究事始め	28
会費納入のお願い	31

「蜘蛛の切手」紹介

梶元 敏也 (京都大学 生態学研究センター)

E-mail: masumoto@ecology.kyoto-u.ac.jp

切手収集は子供の遊びと思っている方々も多いかもしれないが、英語では Philately と呼ばれ、世界的にも大人の趣味として認知されている。はじめのうちはいろいろな種類の切手を収集するのだが、しだいにあるテーマを中心に収集するようになってゆく。このあたりはコレクターに共通する現象である。

読者の中にもクモグッズを収集しておられる方がいると思う。もちろん、本物のクモ収集もコレクションの一つだ。ところで、私は切手を収集しているが、中でも蜘蛛が図柄に使われている切手は、見つけたら必ず手に入れるようにしている。ただ、昆虫や植物の切手などと違って、種類が少ない。しかし、これは幸いなことで、全部集めてもそれほどお金がかからずに済むのである。この点はクモグッズの収集とも共通するだろう。

ところで、先頃行われた第30回蜘蛛学会プレシンポジウム「クモの文化論」が行われた。その際、笹岡さんはクモのグッズをたくさん展示されていた。そこで、私は蜘蛛の図柄の切手を紹介してみたい。



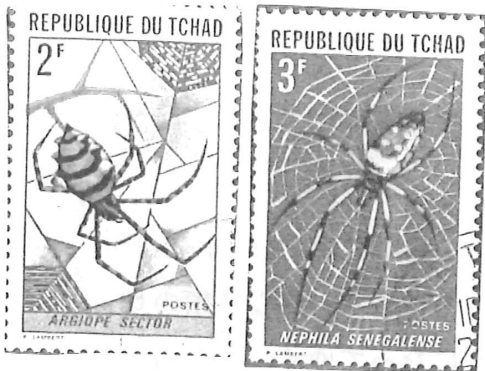
(1) サラグモの一種 *Notiomaso australis* (イギリス)

イギリスがアルゼンチンから奪い取ったフォークランド諸島の希少種を集めたシリーズの一つ。いつもながら、イギリス連邦の生物切手の図柄はすばらしい。



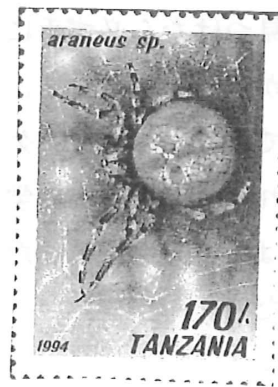
(2) アゴダチグモ *Archaea workmani* (マダガスカル諸島)

生きている化石と呼ばれる蜘蛛を図柄にしている。この蜘蛛は琥珀(バルチックアンバー)の中に埋め込まれていた化石の蜘蛛と同じ形態をしていたということで、ずいぶん有名な蜘蛛なのだそう。



(3) ジョロウグモ *Nephila senegalensis* とコガネグモ *Argiope sector* (チャド共和国)

どちらも、網がバックに描かれているが、本当にこんな網なのだろうか？網まで正確に記述した切手というのはまだないようである。



(4) 蜘蛛5種 (タンザニア)

タランチュラ *Eurypelma sp.*、ハエトリグモ *Salticus sp.*、ツユグモの一種 *Micrommata rosea*、オニグモの一種 *Araneus sp.*、ニワオニグモ *Araneus diadematus*

今回紹介した蜘蛛切手のなかでは(1)と比較しても遜色のないほど美しい図版である。



(5) イロウロウグモの一種 *Argyrodes mellissi*.

(セント・ヘレナ島)

イソウロウグモとはうれしい。一見、大型のオダカグモかと思ったが、このような金色のイソウロウグモがいるのだろう。ぜひ、実物を見たみたいものだ。

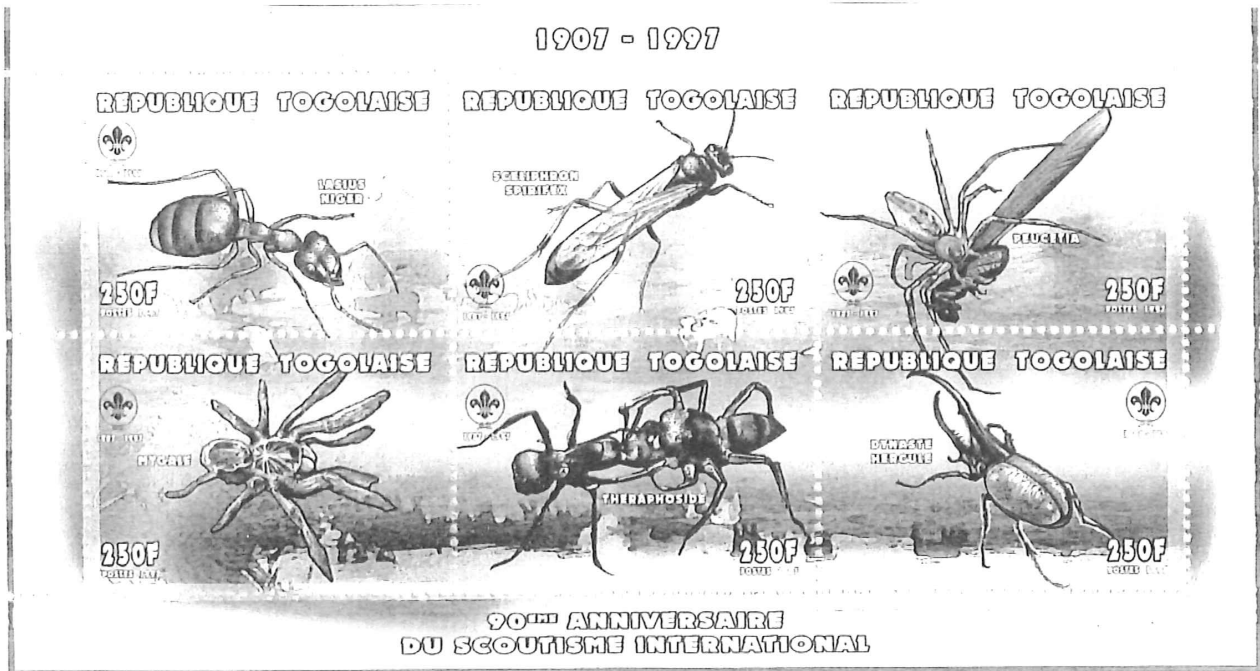


(6) タランチュラとコモリグモ
(コンゴ共和国)

コモリグモの方は蠅を食べているところ。
餌を食べている図というのは日本の切手では見られない構図だ。



(7) コガネグモの一種 (コートジボアール共和国)
ナガコガネに近い種だろうか。これも、網の図柄がバックになっているが、横糸がずいぶん乱れて描かれている。本当にこの網が、このコガネグモの網なのだろうか。



(8) ササグモの一種、タランチュラの一種、アオオビハエトリの一種、
他に昆虫3種 (トーゴ共和国)

種名のクレジットが無いので種名は分からないが、色は比較的きれいな切手シートである。ただ、タランチュラは乾燥した標本の写真をそのまま切手の図柄に使っているようで、このへんのアバウトぶりがいかにも笑える。しかし、ササグモもアオオビハエトリも獲物を食べているところである。アオオビハエトリがアリ食いであることがわかる。

以上、私が持っている蜘蛛の切手を紹介した。こういう、蜘蛛の図柄が切手になっている国というのは、蜘蛛に対する偏見の少ない国なのだろう。それに比べて、残念なことに日本では蜘蛛を図柄に使った切手はまだ発行されていない。日本の場合、昆虫でも、蝶、甲虫、トンボを材料に使っているものが数種あるだけである。郵政省は動物、特に節足動物には冷たいようだ。日本でも蜘蛛を図柄にした切手ができると楽しい。もし図柄にするとしたら、何になるのだろうか。ムツトゲイセキグモやアカイロトリノフンダマシなんていい切手になるのではないだろうか。今年はドラクロアやブルーナの図案が日本切手になっているが、だからといって外来のセアカゴケグモやクロガケジグモだけはかんべんしてもらいたい。

吉住氏採集の大阪府枚方市のクモ

西川 喜朗

吉住卓家さんが以前のご自宅の近くで採集されたクモを、多数同定させていただいた。特別めずらしい種は見られなかったが、ここに同定できた33種を報告する。枚方市のクモの目録はこれが初めてである。採集データはつぎの通りである。

調査地および調査日：大阪府枚方市田口，山田池公園，[5235-15-85]（環境庁のメッシュコード），目録には「山田池」と略記した。1994年4月26日，5月17日，5月28日，6月16日，9月1日，10月20日，1995年5月26日。

大阪府枚方市磯島，淀川左岸，[5235-15-81]（環境庁のメッシュコード），目録には「磯島」と略記した。1994年6月11日。採集者はいずれも吉住卓家（よしずみたくや）氏。

本報告にあたり，貴重な資料を提供いただいた三重県の吉住卓家氏に厚くお礼申し上げます

目録

種の配列と和名は，「クモの学名と和名」（八木沼・平嶋・大熊，1990）によった。

ウズグモ科

マネキグモ 1y, 1994.5.28, 山田池

カタハリウズグモ 1♀, 1994.5.28, 山田池 / 1♀, 1994.6.16, 山田池

ユウレイグモ科

ユウレイグモ 1♂, 1994.5.28, 山田池

ヒメグモ科

ヒメグモ 1♀, 1994.9.1, 山田池

ボカシミジグモ 1♂, 1994.5.28, 山田池 / 1♀y, 1994.6.16, 山田池

シモフリミジグモ 1♀, 1994.5.28, 山田池

ヒシガタグモ 1y, 1994.9.1, 山田池

ムナボシヒメグモ 1♀, 1994.5.17, 山田池 / 1♂, 1994.5.28, 山田池 / 2♀, 1994.6.16, 山田池

サラグモ科

ツリサラグモ 1♀, 1994.5.17, 山田池

センショウグモ科

ハラヒロセンショウグモ 1y, 1994.9.1, 山田池 / 1y, 1994.10.20, 山田池

コガネグモ科

ヤマオニグモ 1y, 1994.6.11, 磯島

ゴミグモ 1♀y, 2♂y, 1994.4.26, 山田池 / 1♂, 1994.5.17, 山田池

ワキグロサツマノミダマシ 1♂, 1994.9.1, 山田池

イエオニグモ 1♀y, 1995.5.26, 山田池

ヤマシロオニグモ 1♂y, 1994.6.16, 山田池

アシナガグモ科

ウロコアシナガグモ 1♂, 1994.5.17, 山田池 / 1♀, 1994.6.11, 磯島

タナグモ科

クサグモ 1y, 1994.4.26, 山田池 / 1y, 1994.5.28, 山田池

コクサグモ 1♀, 1994.10.20, 山田池

フクログモ科

カバキコマチグモ 1♀, 1994.6.16, 山田池

ムナアカフクログモ 1♂, 1994.6.16, 山田池

ネコグモ 3♂y, 1994.10.20, 山田池

カニグモ科

キハダカニグモ 2♂, 1994.4.26, 山田池

アズチグモ 1♂y, 1994.6.16, 山田池

エビグモ科

キンイロエビグモ 1♂, 1994.5.17, 山田池

アサヒエビグモ 1♂, 2♂y, 1994.6.11, 磯島

シャコグモ 1♀, 1994.6.16, 山田池

ハエトリグモ科

マミジロハエトリ 1♀y, 1994.4.26, 山田池

アシプトハエトリ 1♀y, 1994.4.26, 山田池 / 1♂y, 1994.5.17, 山田池 / 1♂,
1994.6.16, 山田池

アリグモ 1♂, 1994.5.28, 山田池 / 1♂, 1994.6.16, 山田池 / 1y, 1994.10.
20, 山田池

オスクロハエトリ 1♂, 1994.6.11, 磯島

チャイロアサヒハエトリ 1♂, 1994.6.16, 山田池

メスジロハエトリ 1♀, 1994.6.16, 山田池

カラスハエトリ 1♀y, 1994.6.16, 山田池 / 2y, 1994.10.20, 山田池

ハエトリグモの一種 1♀, 1994.9.1, 山田池

「タランチュラの飼育」

長谷川夕希子

私がタランチュラを飼い始めたのは、セアカゴケグモの毒グモ騒ぎの真最中でした。研究するでもなく、繁殖させるでもなく、ただ“飼育”することだけを楽しむ私に、タランチュラの飼育という機会を与えて下さったのは、加村先生でした。税関から加村先生の元へ引き取られた十匹の内の貴重な一匹を、こんな私に託してしまった加村先生のことを、その時、「できない子にも分け隔てなくチャンスを与える、素晴らしい先生なんだろうなあ」と感謝したことを覚えています。

頂いた当初は雄か雌かも知らず『タランティノー』と名付けて、それは立派な紳士になるようにと大切にしておりましたが、実は箱入りお嬢さんでした。しかも、とても臆病で繊細なお嬢さんだったので、早く慣れるようによく触れていたのですが、いつも縮こまって恐がり、腹部に円形脱毛症のようなハゲまでできてしまいました。餌もほとんど食べずジツとしてあまり動かかったので、日に日に弱っていくように見え、とても心配でした。

ところが、この心配する気持ちが届いたのか（それはない）、これらは脱皮の準備だったのです。ひっくり返った彼女を見た時、正直、死なせてしまった……と思い、飼育の難しさを改めて痛感しましたが、そっと脚を触ってみると動いたので、生き返るのではないかと水を口元に落とすと飲んだ（ように見えた）のです。その後他のクモ同様、まるで服を脱ぐかのように脱皮を無事終えました。

タランチュラを飼育してから、私は三回脱皮を見ることができました。脱皮の際のひっくり返った姿を見た瞬間は、いつもドキッとします。あの仮死状態だけは、何度見ても人間の私には心臓に悪いなあと思うのですが、だからこそ神秘的で目が離せないのかもしれないかもしれません。タランチュラに限らず、私にとってクモを飼育する上での大きな楽しみの一つは脱皮です。残念ながらクモが脱皮をすることは、蝶や蝉に比べて知られていません。確かに完全変態ではないので、センセーショナルさが足りない分メジャーになれなかったのかもしれない。見た時の驚きと感動は同じだと思うのですが。

脱皮後はとてもツヤツヤした張りのあるお肌(?)になり、食欲も出てきます。いろんな食べ物を試してみましたが一番よく食べるのはコオロギです。コオロギを初めて与えた時は後ろ足で蹴られてしまい逃げてばかりいたのですが、一度防御のために噛みついた際に餌だと認識したらしく、それからはよく食べます。ただ気分によっては全く食べないので、食べない時は両者睨み合い

のストレスが溜まらないよう、諦めてコオロギを出すようにしています。一度雌のコオロギを何日か入れっぱなしにして、土に卵を産みつけられてしまいました。その後コオロギの子供が飼育器いっぱいに大量発生し、かゆかったのか痙攣のようにブルブルと震えたことがありました。この“コオロギの復讐”を教訓に、以後食べないコオロギはすぐ回収を心掛けています。

その他、国産牛肉とマグロ、スイカを食べます。ただ、どの餌も新鮮が基本で、食べ残しや古くなった物には見向きもしません。バナナはかぶりついたようですが触感が気に入らなかったのか、二度と口にはしませんでした。たった一度、アルミを食べた……食べさせてしまったことがあります。牛肉を入れた時に、土がつかないようにとアルミを下に敷いたのですが、牛肉と一緒にぐるぐる巻にして食べてしまいました。気が付いた時には既に止めようもなく、タランチュラに何か異変が起こるのではないかと何週間かハラハラしていましたが、結局取越苦勞に終わりました。

アレ？ここまで読むとひどい飼い主みたい……？？？

そんなことはありません。(ここからが大切なところなので音読して下さい) 税関から引き取った十匹の内まだ生きているのは、家のタランティーノだけだそうです。「なぜ？何が違うの？」という問いに私は自信を持って答えます、「愛情です」と。

余談：以下のような E-mail のやりとりから、今回拙文を投稿させていただくこととなりました。

長谷川 > お借りしておりました本をお返しするのが遅くなってしまい、
> 大変申し訳ございませんでした。
> あまりにも申し訳ないので、何か少しでもお役に立てればと
> 思い、「くものいと」の原稿をと思いましたが、期限の頃と
> なってしまい、反省しております。

吉田先生 > 許ませーん！お詫びとして原稿を書いて下さい。

長谷川 > ガーーン！！(;;)

> では、書いてみようかと思うことにします。
> どんなんになってもよろしいでしょうか???
> 高尚な「くものいと」の品位が落ちることになっても……。

吉田先生 > 大丈夫です！

長谷川 > これから書いてみます……どっこいしょっ(重い腰をあげた)
やっぱり品位が落ちたような……吉田先生ごめんなさい。

姫路市青山でマメイタイセキグモとカトウツケオグモを採集

船曳和代

9月5日(土)に姫路の科学館へクモの網標本の展示を頼みに行ったところ、今年中は無理なので来年の6月頃に写真とクモの標本を同時に展示してはどうかという話になった。そのとき館長さんより科学館周辺のクモのリストづくりを依頼された。

姫路科学館周辺は私の子供の頃には桜峠と言われていたところで、小学校の遠足でたびたび訪れたところである。桜の木がたくさんあったという記憶もなく、茨の生えている原っぱを横切り、竹やぶや木々の茂る山道をえんえんと歩いて行きついたところには、何の変哲もないダムがあったことを憶えている。

そこが今は整備され、原っぱは瀟洒な住宅やマンションで埋め尽くされ、山道沿いには科学館をはじめ子供の館や星の子館、ネイチャーセンターなど近代的な設備を持った立派な建物がたち並んでいる。それでも周辺にはまだ深い山が残っており、鳥や蝶、トンボをはじめ多くの生き物が住んでいる。館長さんは周辺のトンボや蝶など生き物のリストづくりをおいおい進めていきたい意向のようである。

館長さんは気さくな方で、「いつでも良い日に採集に来て下さい。もし私がいたら良いところをご案内します」とおっしゃって下さった。一週間たった12日(土)の午後、科学館を訪れると運よく館長さんはおられ、「それでは今から行きましょう」と捕虫網を手にし先に立って歩いていかれる。格好は、半袖のワイシャツに普通のズボン、革靴という事務所着のままである。

「先生、その格好で行かれるんですか」というと「ええ」と笑っておられる。事務所の裏口を出ると、道はすぐ谷ぞいの山道へと続いている。館長さんはその格好で、おそれることなく草の茂る中に入って行かれる。さすがに植物や虫に興味を持っておられる方である。

館長さんはもともと植物が専門の方で、クモはほとんど知っていらっしゃらない。私が、これがアシナガサragモ、あれがヒメグモ、屋根のようにした枯れ葉の中にクモがいます、など説明しながら、採集していく。館長さんは私より丁寧に時間をかけて、葉の裏を見たり、つづれ合わせた枯れ葉を開けてみたりして、クモを捜して下さった。

採集し始めて30分位した頃、枝の上に引っかかっていた枯れ葉の中を見ておられた館長さんが、「何かいますよ」と声をかけて下さった。振り返って、網で受けながら枯れ葉の中から下がってきたクモを見るとマメイタイセキグモのようである。「先生、ちょっと待って下さい。これは多分マメイタイセキグ

モだと思います。珍しいクモなんです。生かして持って帰ります」と私は興奮気味にしゃべりながらフィルムケースに収めた。嬉しくて、それでももしや間違いではとケースの中のクモをじっくり確かめてみる。特徴のマメイタ模様のある腹部が見える。確かにマメイタイセキグモである。

その後は私も館長さんに習って、枯れ葉がつづれ合ったものを一つ一つ開けて見ていた。マメイタイセキグモを採集したほぼ同じ所、そしてすぐ後で枯れ葉から飛び出してきたクモをエタノールの中に入れた。黒っぽい体に黒っぽい足、足の半分くらいまでが白い。老眼の進んだ目には細部までは分からないが、どうもカトウツケオグモっぽい。今さっきマメイタイセキグモという珍種を採集したばかりなのに、それより珍しいカトウツケオグモを採集できるなんて、ちょっと虫が良すぎる。多分カニグモかなんかだろう、後で見ようと思い直し、採集を続行する。二人で2時間あまり採集した。オオトリノフンダマシの立派な卵のうがセイタカアワダチソウに2個つけられていたが、クモはいなかった。翌日、同定のためにエタノールから出して調べてみると、やはりカトウツケオグモであった。

クモを採集することに慣れている私は、どうしても一種の思いこみがあり、ここにこんなクモがいそうだという感覚で採集してしまうため、見るところが同じようなところに片寄ってしまうのではないかと思われる。その点館長さんはクモに関しては初心者で、どこにでも何にでもいるのではないかという目で捜される。その違いがこの二種のクモを見つけだせたのではないかと思う。この日は、私の採集態度を大いに反省させられた日でもあった。



関西クモ研究会採集会報告

田中穂積

1998年10月4日(日)。参加者は、加村隆英・山野忠清・吉田真・田中穂積・田中和代の5人であった。

今年は台風の発生数が例年に比べて非常に少ないとのことであったが、この一ヶ月、急に発生し、それがまた日本のどこかに上陸するという厄年のようである。数日前にも和歌山に上陸、日本を縦断して大雨をもたらし、その後も晴れることなく降り続いていた。

当日の朝。外を見ると、雲一つない快晴。これを秋晴れというのだろう。久しぶりのことである。今日は関西クモ研究会の採集会の日である。誰か心がけの良い人がいるようだ。

午前11時。集合場所になっている JR 山中溪駅で待つ。結局集まったのは上記の5名であった。この場所は春(6月)に引き続き、今回が2回目の調査となる。先の採集会より少人数で少し寂しいものとなった(船曳さんと河井さんは、日にちを忘れていたらしい)。

山野氏と私の自家用車2台でいよいよ出発。採集地である岩出町境谷に向かう。前回採集したあたりを今回もゆっくりと採集する。人数が少ないせいか、あまり声も弾まない。畑ではコオロギなどが鳴きあい、もの悲しく夏の終わりを告げている。ただひとつ、ジョロウグモだけは金色に輝く大きな網を張り、元気に存在感を示していた。

小一時間周辺を採集し、昼食を取る。その後、前に行った堀河谷はもう一つ良くなかったので、行く場所を変更。山野氏の提案で、彼のお勧めの場所・和歌山市加太公園まで、約1時間車で飛ばす。

加太公園はうっそうと茂った雑木林。きちんと手入れがされてはいるが、枯れ葉などが積もり、リターに生息するクモ類には最適のようだ。今回は少し乾燥気味ではあったが。ここでリターをほじくり返し、タナグモ類などを採集する。

この公園は大阪湾に面し、すぐ向こうには、友ヶ島、淡路島、四国などが一望できる。見晴らしがとてもすばらしい。この高台の地下には、その昔、海に面して大砲をおいた穴がいくつもあり、それらが現在、レンガを組んで残されている。その少し薄暗くなったあたりにはオオヒメグモの網が多数存在し、その網で数種類(?)のイソウロウグモ類を発見。腹部背面が銀色の美しいシロカネイソウロウグモや、色の黒い別種のクモ(?)を採集。その正体は? 吉田さんが持ち帰る。今後の楽しみが一つできた。今回の唯一の成果であった?

蜘蛛礁計画

牧野達也

ヒトエグモと初めて出会ったのはおばあちゃんの家の前植木を整理しているときでした。ブロックを立ててその上に木の板を渡し、植木を載せている花段を移動しようとしている時でした。植木をのけ、木の板をはずしたときにブロックの穴の中にあるのを発見したのです。これを始めとしてこの後、この家と付近で合計7頭のヒトエグモを捕獲もしくは目撃することになります。その発見リストを次に記します。

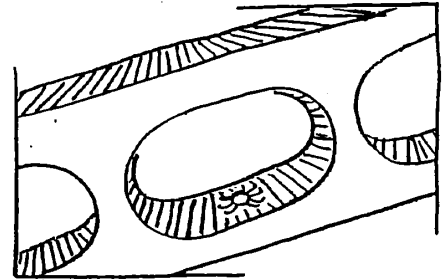


図1. ヒトエグモを発見!

これまでの発見記録(目撃&捕獲記録)

- *1992.10.10 京都市東山区今熊野宝蔵町山本ツル宅(以下、クモ屋敷)前
花台ブロックの穴の中 幼体 →93/8/7 渴死
- *1994.4.25 クモ屋敷内
1F 玄関脇の部屋 散らかった荷物の下 幼体 渴死
- *1994.7 クモ屋敷内
1F 掃除中に掃除機に吸い込む 幼体 死体
- *1996. クモ屋敷内
2F 座布団の上 メス成体 圧死
- *1997.6 クモ屋敷より徒歩6秒の地藏さんの祠
祠の壁にいた 捕獲できず 大きさからして幼体
- *1997.12.14 クモ屋敷前
ブロックの穴の中 幼体 98/7/6 死亡
- *1997.12.28 クモ屋敷より徒歩6秒の地藏さんの祠
祠の壁にいた 幼体 渴死

これらの発見はいずれも日中でした。この内の約半分が戸外で、しかもそれらは似通った状況で発見されています。なかでも家の前のブロックの穴の中からは年月を経て二度も発見されています。さらにこの二例の発見状況は、全く同じでした。

ブロックの穴の中の様子は土や枯葉など物体は何も入っておらず、特に狭い空間になっているわけではありませんでした。その発見された状況は図鑑や人の話から抱いていたイメージとは違いました。

ヒトエグモの生息場所=狭い隙間を好み、家屋のわずかな隙間(たとえば柱と敷居の間)などに身を潜める。また人家付近の石碑の隙間などでも見られる(原色日本クモ類図鑑より)。植木鉢の下にいたり、夜中畳の上を徘徊しているとか、押入れの奥の箱の中から見つかったとか聞きますが、これらの話は少なくとも私が知っている発見例にはあまり当てはまりません。

クモ屋敷のヒトエグモは日中外壁を徘徊したり、狭くもない空間に居たりしているのです。そこで一計を案じ、ヒトエグモのアパートを作ることにした。上手くいけば春にはヒトエグモがうじゃうじゃ湧き出てくるかもしれないという甘い考えのもとに…。

蜘蛛礁計画

蜘蛛礁計画概要

ヒトエグモが複数回捕獲されている状況をつくり、その環境がヒトエグモを呼ぶことができるかの実験。漁礁のクモ版ということで蜘蛛礁と呼びます。そしてあわよくばヒトエグモがざっくざく捕獲できるかな…ということです。

蜘蛛礁計画内容

複数回発見及び捕獲されている状況の中で比較的再現しやすいのは、地面の上に穴明きブロックを置き、その上をブロックや木・石などで塞ぎ、ヒトエグモが入るのをまつという方法です。ブロックの置き方は穴を縦の方向になるように置いたり(以下縦置き)、横になるように置いたり(以下横置き)、日の当たらないところに置いたり、日の比較的当たるところに置いたり、ブロックだけでなく植木鉢を何個か重ねてうつ伏せに置いたりして見る事にしました。

蜘蛛礁設置日 '97/12/14

蜘蛛礁実験地 京都市東山区今熊野宝蔵町(クモ屋敷前)

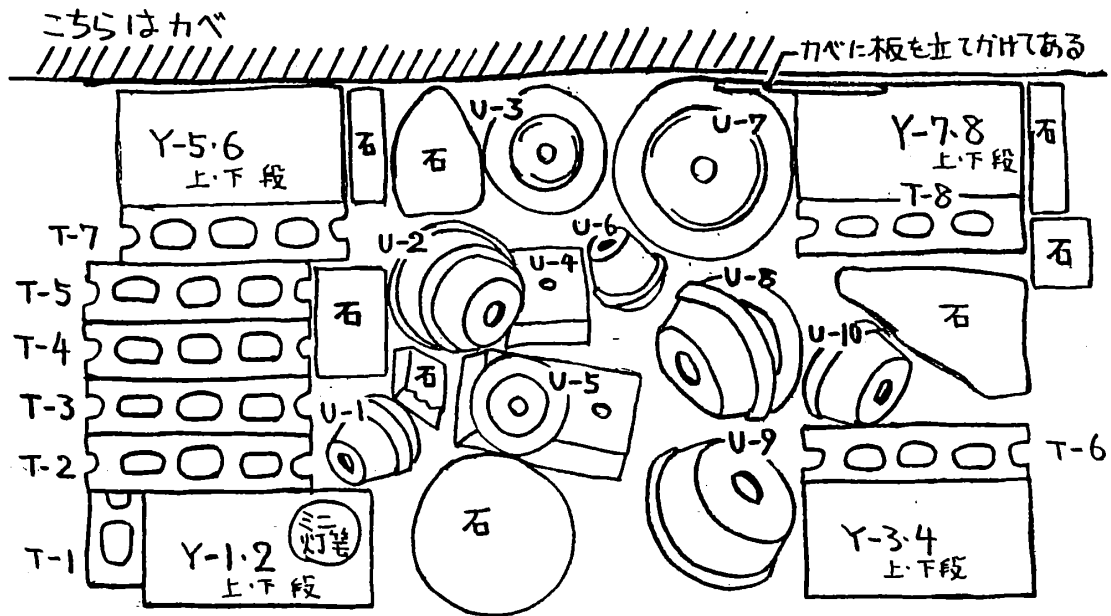
過去2回ブロック内でヒトエグモが見つかった場所

ブロックの設置 直接日光や雨の当たらない場所と当たる場所

陽の当たらない場所：アルミ製の花段の下 昼なお薄暗い。ブロックを16個(穴数/46穴)設置した。内8個(穴数/24穴)はその上に花段を載せるので横置きとし、片方の口をブロック等で塞いだ。残り8個(穴数/22穴)は縦置きに並べ、穴の上部をブロック片や平らな石で塞いだ。その他に開いている所に植木鉢を1~7鉢づつ重ねて10山程適当に配置した。図2参照

陽の当たる場所：花壇の縁 陽が射す時間もあれば、雨が降り込むときもある。ブロックを10個(穴数/25穴 *注 延28穴だがハーフ高のブロックを2段重ねにしているところがあるので25穴とする)縦向きで設置した。こちらは花壇の縁取りなので25穴中10穴は土で埋まっている。穴の上部は特に意識して塞がずに、所々植木鉢を載せている程度。図3参照

その他の調査対象：花段の上に載せている植木鉢の下《花段上の植木鉢はその形状で次の2種類に分けた。床面と点で触れる(風通しが良い)点底と風通しの悪いベタ底》及び、植木鉢同士の空間(それより上の空間は対象外)。花段の下の空間。*注 空間はヒトエグモにはあまり関係が無いと思うがついだから見ておく。図4・5参照



T-1~8 ブロック縦置き / Y-1~8 ブロック横置き

- | | | | | | |
|-----|------|-----|------|-----|------|
| U-1 | ハチ5段 | U-5 | ハチ3段 | U-9 | ハチ1段 |
| -2 | ハチ3段 | -6 | ハチ2段 | -10 | ハチ2段 |
| -3 | ハチ2段 | -7 | ハチ2段 | | |
| -4 | ハチ4段 | -8 | ハチ7段 | | |

図2. 日陰ブロック配置図 T群・Y群・U群

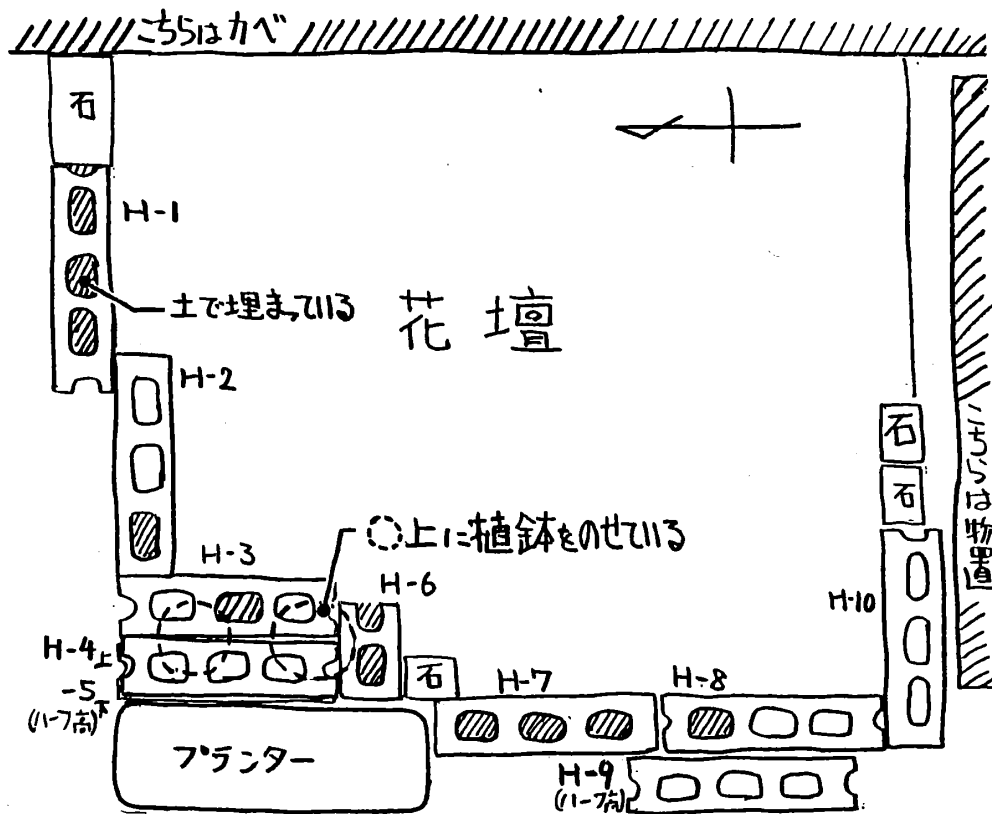
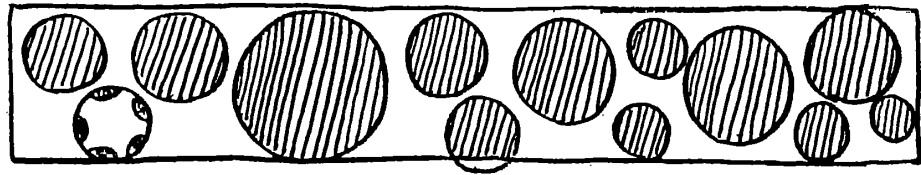
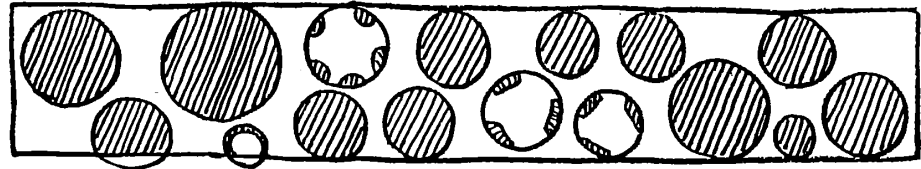


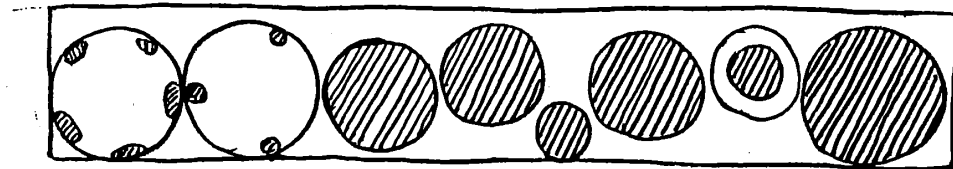
図3. 日向ブロック配置図 H群



上段
点底1鉢
全底12鉢



中段
点底4鉢
全底12鉢



下段
点底2鉢
全底6鉢



图4. 花段植木鉢配置图

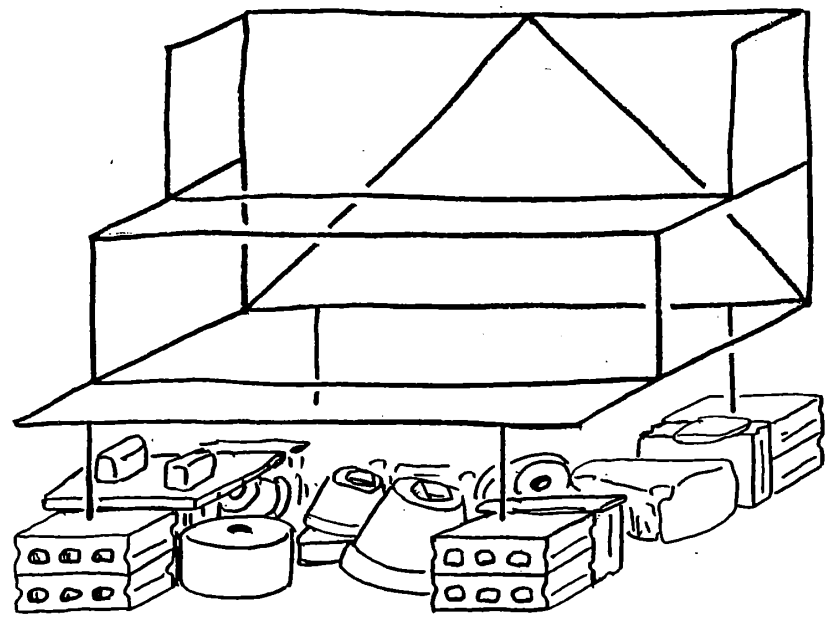


图5. 花段フレーム图

調査結果

第1回目調査 98/07/06 設置日より経過日数 204日 調査時刻 夕刻

調査地点： 陽の当たらないところ 縦向き T-1~6 横向き Y-1~4
 植木鉢 U-1~2
 陽の当たるところ H-1~10
 その他 花段下の空間

調査結果： ヒトエグモの発見及び捕獲は無し
 その他のクモ数種捕獲

*表1参照

第1回目調査結果98/07/06 経過日数204日

設置区域	ブロックナンバー	調査	クモ類	クモ以外				
花段下縦置き	T-1		0					
	T-2		0					
	T-3		0					
	T-4		0					
	T-5		ヤチグモ 1			ヒル 1		
	T-6		0					
	T-7	*						
	T-8	*						
花段下横置き	Y-1 上段		0					
	Y-2 下段		0					
	Y-3 上段		0					
	Y-4 下段		0					
	Y-5 上段	*						
	Y-6 下段	*						
	Y-7 上段	*						
	Y-8 下段	*						
花段下植木鉢	U-1 5鉢		ヒラタグモ 1					
	U-2 3鉢		0					
	U-3 2鉢	*						
	U-4 4鉢	*						
	U-5 2鉢	*						
	U-6 2鉢	*						
	U-7 2鉢	*						
	U-8 7鉢	*						
	U-9 1鉢	*						
	U-10 2鉢	*						
花段下空間	花段下空間		0					
花段上植木鉢下	上段点底 1鉢	*						
	上段べた底 12鉢	*						
	中段点底 4鉢	*						
	中段べた底 12鉢	*						
	下段点底 2鉢	*						
	下段べた底 6鉢	*						
	鉢の空間	*						
花壇縁取り	H-1 土で埋まる		0					
	H-2		0					
	H-3		0					
	H-4		0					
	H-5		0					
	H-6 土で埋まる		0					
	H-7 土で埋まる		0					
	H-8		0					
	H-9		0					
	H-10		0					
	プランター下	*						
				2	1	0	0	0

表1. 第1回目調査結果

*印は調査対象外を示しています。

第2回目調査 98/07/18 設置日より経過日数 216日 前回より経過日数 12日

調査時刻 昼間

調査地点： 陽の当たらないところ 縦向き T-1~8 横向き Y-1~8
植木鉢 U-1~10

陽の当たるところ H-1~10 プランターの下

その他 花段下の空間 花段上の植木鉢の下及び空間

調査結果： ヒトエグモの発見及び捕獲は無し

その他のクモ数種捕獲

*表2参照

第2回目調査結果98/07/18 経過日数216日 前回より12日

設置区域	ブロックナンバー	クモ類	クモ以外					
花段下縦置き	T-1	0						
	T-2	0						
	T-3	ヒメグモ 1		ヒル 1				
	T-4	0		ヒル 1	ナメクジ 1			
	T-5	ヒメグモ 1						
	T-6	ヤチの巣 1	ヒメの巣 1					
	T-7	0						
	T-8	0						
花段下横置き	Y-1 上段	0						
	Y-2 下段	0						
	Y-3 上段	0						
	Y-4 下段	0						
	Y-5 上段	0						
	Y-6 下段	ヤチグモ 2	ヒメグモ 1	ヒル 1				
	Y-7 上段	0						
	Y-8 下段	0						
花段下植木鉢	U-1 5鉢			ヒル 2				
	U-2 3鉢				ナメクジ 1			
	U-3 2鉢	ヤマシログモの卵のう 1	コモリグモ 1	ヒラタグモ 1		ナメクジ 1		
	U-4 4鉢	ナミハ 2			ヒル 2			
	U-5 2鉢				ヒル 3			
	U-6 2鉢	ナミハ 1			ヒル 1			
	U-7 2鉢	ハエトリ 1			ヒル 3			
	U-8 7鉢	ナミハ 1	ヤチの巣 1		ヒル 2	ナメクジ 1	ヤスデ 1	
	U-9 1鉢	0						
	U-10 2鉢	ハエトリ 1	ヒメグモ 1	ナミハ 1	ヒル 1			
花段下空間	花段下空間	ウズグモ 4	ヒメグモ 1	ヒメグモ 1				
花段上植木鉢下	上段点底 1鉢	0						
	上段べた底 12鉢	0						
	中段点底 4鉢							
	中段べた底 12鉢	ヤチの巣 1			ヒル 1	ナメクジ 4	ヤスデ 1	ダンゴムシ 4
	下段点底 2鉢					ナメクジ 2		
	下段べた底 6鉢					ナメクジ 5		ダンゴムシ 2
鉢の空間	ウズグモ 1							
花壇縁取り	H-1 土で埋まる	0						
	H-2	0						
	H-3	0						
	H-4	0						
	H-5	0						
	H-6 土で埋まる	0						
	H-7 土で埋まる	0						
	H-8	0						
	H-9	0						
	H-10	0						
	プランター下	0						
			27	18	15	2	0	

表2. 第2回目調査結果

第3回目調査 98/12/27 設置日より経過日数 378日 前回より経過日数 162日

調査時刻 昼間

調査地点： 陽の当たらないところ 縦向き T-1~8 横向き Y-1~8

植木鉢 U-1~10

陽の当たるところ H-1~10 プランターの下

その他 花段下の空間 花段上の植木鉢の下及び空間

調査結果： ヒトエグモの発見及び捕獲は無し

その他のクモ数種捕獲

*表3参照

第3回目調査結果98/12/27 経過日数378日 前回より162日

設置区域	ブロックナンバー	クモ類	クモ以外						
花段下縦置き	T-1		0						
	T-2	ナミハ	1						
	T-3	ナミハ	1						
	T-4	ヒメ	1	シモフリヤチ	1				
	T-5	シモフリヤチ	2	ヒラタ	1				
	T-6	シモフリヤチ	1						
	T-7		0						
	T-8		0						
花段下横置き	Y-1 上段		0						
	Y-2 下段	シモフリヤチ	1						
	Y-3 上段		0						
	Y-4 下段		0						
	Y-5 上段		0						
	Y-6 下段		0						
	Y-7 上段		0						
	Y-8 下段	ヒメ	3						
花段下植木鉢	U-1 5鉢	ヒラタ巣あと	2						
	U-2 3鉢	ヒラタ巣あと	2			ヒル	1		
	U-3 2鉢	ハエトリ	1	ユカタヤマ シログモ	1	脱皮殻	1		
	U-4 4鉢		0						
	U-5 2鉢	ヒラタ	1	オトヒメグモ	1				
	U-6 2鉢	ハエトリ	1	ハエトリ巣跡					
	U-7 2鉢		0			ヒル	1	ナメクジ	1
	U-8 7鉢		0						
	U-9 1鉢		0						
	U-10 2鉢		0						
花段下空間	花段下空間	卵のうの ような物	3						
	ミニ灯笼	ヒラタ	1	ヒラタ巣あと	2				
花段上植木鉢下	上段点底 1鉢		0			蛾の巣	1		
	上段べた底 12鉢	ハエトリ板殻	2	ハエトリ巣跡	3	アリゲモ	1	カタツムリの殻	1
	中段点底 4鉢		0					ナメクジ	4
	中段べた底 12鉢	ヒラタ	1					カタツムリの殻	3
	下段点底 2鉢		0					ナメクジ	2
	下段べた底 16鉢		0						蛾の巣
	鉢の空間		0						
花壇縁取り	H-1 土で埋まる		0						
	H-2	ヤチ巣あと	1						
	H-3		0						
	H-4 上 ハーフ		0						
	H-5 下 ハーフ		0						
	H-6 土で埋まる		0						
	H-7 土で埋まる		0						
	H-8	カレハヒメ	1						
	H-9 ハーフ		0						
	H-10		0						
	プランター下		0						
			37	2	6	6	6	6	

表3. 第3回目調査結果98/12/27

考察

今までの調査ではヒトエグモが1頭も発見されなかった。考えられる限り発見時の状況に近づけたはずなのだが。それではなぜ、ヒトエグモが発見されなかったのか。

調査対象のうち本命はT-1~8の22穴である。この22穴をもう少し詳しく見てみる(表4参照)、第2回目と第3回目では穴のふさぎ方が違っているのに気づくと思うが、これはあなの

ブロック穴No.	第2回調査98/07/18			第3回調査98/12/27		
	穴を塞ぐもの	明るさ指数	クモの発見	穴を塞ぐもの	明るさ指数	クモの発見
T-1-1	石等	4		無し	6	
T-2-1	石等	3		板等	2	1
T-2-2	石等	4		板等	2	
T-2-3	石等	4		板等	1	
T-3-1	石等	3		板等	2	
T-3-2	石等	3		板等	2	1
T-3-3	石等	4		板等	1	
T-4-1	石等	3		板等	2	1
T-4-2	石等	4		板等	2	1
T-4-3	石等	3		板等	1	
T-5-1	石等	3	1	板等	2	1
T-5-2	石等	4		板等	2	1
T-5-3	石等	3		板等	1	
T-6-1	無し	5	1	板等	3	
T-6-2	無し	5		板等	3	
T-6-3	無し	5	1	板等	3	1
T-7-1	無し	6		無し	6	
T-7-2	無し	5		石等	4	
T-7-3	無し	5		石等	3	
T-8-1	無し	5		石等	4	
T-8-2	無し	5		石等	3	
T-8-3	無し	5		石等	3	

表4. ブロック穴の様子

塞がり方が良くなかったので改良を加えた結果である。この2回の結果を延べ穴数として考えると、合計44穴の内、板で塞いでいるのは15穴、石等で塞いでいるのは18穴、塞いでいないのは11穴である。これらの穴を中の明るさを元にいくつかに分けてみる。ただし、実際に明るさの測定をしたわけではなく、状況的に判断してである(表4・5参照)。穴の中が明るいという事は当然それだけ風通しも良いという事で明るさ指数によって湿気なども微妙に違うと思われる。

穴の塞ぎ方の様子	明るさ指数
穴を塞がない 穴位置が日陰の縁	6
穴を塞がない 穴位置が日陰の奥	5
穴の塞ぎ方が不完全なもの	4
穴は塞ぐが塞ぐものが穴径より少し大きいぐらいで光が多く入っていると思われるもの(主に石等で塞いでいるもの)	3
穴は塞ぐが密着が不完全で横からの光が入る可能性の有るもの	2
穴は塞ぐが密着が不完全で横からの光が入る可能性の小さいもの	1
穴の塞ぎ方が完全に密着するもの	0

表5. 穴内の明るさを上記の7段階に分けてみた

穴の様子とクモ類の発見の状況を表にして見ると下のようになった(表6)。

明るさ指数	穴の数	クモ類の発見数	明るさ指数	穴の数	クモ類の発見数
6	4	1	2	8	6
5	7	1	1	4	0
4	8	1	0	0	0
3	13	2			

表6. 明るさ指数とクモの発見数

これらから考えられるのは、

明るさ指数が6～3までは穴の中の暗さ加減が足りず、暗所を好むクモすらこない。

明るさ指数が2では他種の暗いところを好む造網性のクモが多く入ってきて網を張るため徘徊性のヒトエグモの居る場所がない。

明るさ指数が1のところでは他種のクモには暗すぎるが、ヒトエグモには明るすぎる。

明るさ指数が0のところではヒトエグモが生息するには丁度良い明るさと湿度である。

つまり明るさ指数が1～0の環境を増やしてやることによりヒトエグモがより多く発見されるのではないかと思われる。しかし、実際の調査内容としては明るさ指数が1～0の環境の穴が少なすぎる。これでは希望的観測の域を出ないと言うしかないので、今後も引き続き実験を続けていきたいと思えます。

今後の調査予定

明るさ指数が1～0の環境をふやし、半年に1回程度全調査範囲を調査する。

改良点：現在穴の上を塞ぐのに使っているのは、花段に使用しているのとおなじプラスチックの板なので、その板とブロックの間に薄いベニアを入れて、さらに上に重しの石を載せて密着度を高める。硬い木の板を載せているところも同様にする。石で上を塞いでいるところは全て木の板に変更する。実験的に1ブロック(3穴)板とブロックの間に紙を何枚か挟み完全な密着をつくる。環境の変更は99/01/02に行った。

明るさ指数の変化は、6/2(明るさ指数/穴数)→6/0 5/0→5/0

4/2→4/0 3/6→3/0 2/8→2/7 1/4⇒1/9

0/0⇒0/6(この内3つは紙を挟んだものである)

次回調査予定：1999年3月頃・7月頃・12月頃の内2～3回を予定

調査のほうがうまく進みましたらまた報告します。

関西クモ研究会 例会の記録

1998年12月13日(日)に四天王寺高等学校(大阪市天王寺区)で、例会が開催された。今回は、遠く関東から新海明さん・谷川明男さんが来られ、また、島根大学の学生さんも参加されて、にぎやかな例会であった。

役員会

例会に先立って、役員会が開かれた。

出席者：山野忠清，西川喜朗，吉田真，加村隆英，牧野達也(5名)。

話し合われた主な内容は以下のとおり。

1) 会員数

現在 58 名。ただし、この中には会費未納で退会扱いにしなければならない者が若干含まれている。(なお、当日の例会参加者のうち、桂あやめさんと榊元敏也さんが入会されたので、計 60 名となった。)

2) 今後の行事予定。

採集会：1999年3月21日(日)と1999年9月19日(日)に姫路方面で行う。

例会：1999年12月12日(日)に四天王寺高等学校で行う。

合宿：1999年6月または7月に2泊3日の合宿を行う予定。詳細については今後、事務局で検討する。

3) 「くものいと」の編集

現在、第25号の編集を進めている。1999年1月に発行の予定。

会員の清水裕行さんから、ご自身の著作『兵庫県クモ目録，県内のクモはどれだけ調べられてきたか』(約50ページ)を「くものいと」の増刊号として発行してほしいとの申し出があり、検討の結果、了承された。なお、その経費については、以下のように扱うことが了承された。50ページ相当のものを通常の印刷形態(ワープロ原稿のコピー)で70部作成した場合の経費と会員への郵送料を会で負担し、それを越える分については著者の負担とする。

4) 会計

会費の納入状況についての報告があった。詳細は後日「くものいと」誌上に掲載する。

例会

参加者：石川理恵，伊田由紀美，大崎茂芳，桂あやめ，加村隆英，河井安子，小松原葉子，座古禎三，清水裕行，新海明，須賀瑛文，田中穂積，谷川明男，徳本洋，西川喜朗，根来川淳，福本伸男，船曳和代，牧野達也，榊元敏也，榊

元智子，山野忠清，吉田真（計 23 名）

1) 講演発表

新海明：西表島のヒメユウレイグモの網構造と餌捕獲行動

谷川明男：チリイソウロウグモよおまえもか

徳本洋：ジョロウグモが消えた？島

吉田真：関西地域のクモ・ファウナのリスト作りについて

清水裕行：安威川流域のクモリストに追加すべき種

西川喜朗：中国クモ紀行

2) 総会

役員会の報告が行われ，その内容が承認された。なお，清水裕行さんの著作に関しては，「くものいと」の増刊号ではなく，通常の号のひとつ（予定では第 26 号）として扱うことが決まった。

また，さきに発行した「くものいと第 18 号」に関する編集及び会計について，一部の人から，不備があったとの指摘があったが，話し合いの結果，不適切はなかったとの了解が得られた。さらに，「くものいと」の編集，作成に関して以下の 2 点が確認された。(1) 会員以外の者に原稿を依頼することを含め，編集に関わることがらについてはすべて編集担当者に一任すること。(2) 作成にかかる経費（紙代やコピー料など）の支出については不明瞭な点の残らぬよう適正に処理すること。

3) すべての講演終了後，全員が自己紹介を行った。初参加の桂あやめさんは和服を着ておられて，円網のデザインをあしらった帯を披露された。

近況報告

西川喜朗

標本がたくさんたまっています。採集記録や同定ができたものは「くものいと」に記録を残していくつもりです。皆さんも同定できたものを「くものいと」に残していきましょう。新海明さん、谷川明男さん、徳本洋さん、遠いところからご出席いただき、興味深いお話、ありがとうございました。

小松原葉子（衣装美術作家）

クモ研究会の一員としてやっと参加し始めています。見るもの、聞くこと、

もう不思議ワールド網でいっぱいです。専門家のお話を聞くのはとても興味深く、私なりのインスピレーションを張り巡らせてくれます。これからもいろいろな機会を通じて会員の皆様、先生方と接していただいて、お話しするのを楽しみにしています。

友人の（クモ達・クモダチと呼び合っています）桂あやめさんとこれからも時々参加しますので、どうかよろしくご指導下さい。クモ作品も、また観ていただけたらと思っています。

田中穂積

いままでの南西諸島などで採集してきた標本について、鳥ごとに分布などをまとめています。とくに何か言えるかどうか分かりませんが、楽しく進めています。

須賀瑛文

1) 現在、名古屋域のクモを調べています。同定のご協力をお願いします。
2) 1999年2月11日に中部蜘蛛懇談会の総会兼研究会を開きます。関西からもぜひお出かけ下さい。場所：中生涯学習センター（名古屋地下鉄名城線で上前津下車⑥出口より出る）。午後1時半からです。

榊元智子

今年の夏は学会のお手伝いでバタバタしましたが、「滋賀県生きもの調査」のボランティア調査員になり、滋賀県のクモを採集し、調査しました。とはいっても、家の周り立命館大学（草津市）周辺だけでしかできませんでした。その上、目につくクモを取っていただけでしたので、全く不十分です。来年も続けてトラップを仕掛けて、コモリグモやワシグモ類も採集したいと思います。

榊元敏也

今年は、滋賀県のいろいろなクモを観察する機会に恵まれました。マネキグモ、アリグモ、オナガグモ、アカイトトリノフンダマシ等々。野外でじっと観察していると、いろいろな研究のアイデアが浮かんできました。来年は、今年得られたアイデアを実行に移していきたいと考えています。

徳本洋

石川県版レッドデータブック作成作業が始まり、私は「その他の動物」担当にされました。「その他」の中にクモも入っていますが、クモ以外の諸々が含

まれています。昆虫でも「その他の昆虫」担当とされて、往生しています。

河井安子

今年の学会で萱島先生から、「クモの卵のうで（貼り絵風に）絵を描いてみてはどうですか？」というお話がありました。これだったら私にもできそうだと思います。来年は私も学会に参加できるぞと思っていました。

さて、実際に集めてみると、同じ種類の卵のうが多く、たくさんの種類を集めることができないことが分かりました。色も同じようなものも多く、困っています。現在も少しずつ集めていますが、来年の学会までには、とうてい集まりそうにありません。そこで現在は、クモの脱皮殻も集めています。

それと平行して、映画関係のボランティアをしている関係で、クモに関するビデオを集めています。思いがけなく桂あやめさんから、「アニメ：くもとちゅうりっぷ」のビデオを頂けるとのこと。とても嬉しいお申し出でした。いつか学会で、クモに関するビデオ等をご紹介したいと思っています。

座古禎三

久しぶりに参加させていただき、楽しい一日を過ごさせてもらいました。これからも頑張って研究していこうと思います。

福本伸男

40年間の教員生活を終えて5年。年金生活もすっかり板に付いてきました。日常生活の大筋は60～70才の人たちに囲碁や卓球を教える（というより一緒に遊ぶ）ことから成っていて、空き時間は科学番組のビデオ編集かな。来年（1999年）船曳和代さんが、市立姫路科学館でクモの展示会をされるそうなので、楽しみにしています。

牧野達也

最近ようやくパソコンを導入しました。これでいままで写真の断片の寄せ集めのパノラマ写真を作っていましたが、コンピュータ処理をしたつなりのパノラマが作れると期待しています。

大崎茂芳

1998年度はアメリカの医学会誌・物理学会誌・生体高分子学会誌などに投稿しましたが、1999年度は蜘蛛学会にも投稿しようと思っております。また1999年度は、沖縄に出向いてオオジョロウグモを採集したいと思っております。

すので、誰かお供をお願いいたします。

桂あやめ

震災後に淡路島の父の実家の安否を確かめに十数年ぶりに行ってみた時、庭先に朝露を浴びた直径1 mはあろうかという円型の、レース編みのようなクモの巣を発見。それ以来、クモの巣をモチーフとした服やアクセサリーの収集を始め、興味はその網の作者、クモちゃんへと移ってまいりました。見た目から入った私ですが、草津のシンポジウムでいろいろなクモばなしを聞き、よりいっそうクモにからめ取られた感じです。

また、クモファッションを身にまとい、会合に参加させていただきたいと思っています。

新海明

関西クモ研究会の例会に初めて出席しました。自由討論が多岐にわたり、楽しかったです。地方のクモ同好会どうしの交流をさらに活発にしたいものですね。

谷川明男

日本産のコガネグモ科、アシナガグモ科の分類をテーマにしています。とくにオニグモ類の整理を進めようとしています。標本が不足気味で困っています。関東周辺と沖縄島、西表島のものはいいですが、それ以外の地方の標本がとくに不足しています。お手元の標本（とくに西日本産！）でご貸与いただけるものがありましたら、ぜひお願いいたします。直近の課題は、カラフトオニグモ、サガオニグモ、キンカタハリオニグモです。キンカタハリオニグモの標本はほとんど持っていません。カラフトオニグモとサガオニグモは個体数は結構あるのですが、採集地が関東地方と沖縄に片寄ってしまっています。お助けいただければ幸いです。ご貸与いただける標本がありましたら、勤務先に郵送して下さい。〒248-0025 鎌倉市七里ガ浜東 2-3-1 県立七里ガ浜高校 谷川明男

今年のクモ学会大会で「クモの文化論」というテーマでプレシンポジウムを行うことが準備委員会で決まったのは、私の記憶によれば、確か2月頃だったと思う。まさか、自分がそのコーディネーターになるなんて、全く想像もしていなかった。準備委員会でプレシンポの係りに指名されたときは、「どうしたらよいのだろう」と、正直言って不安な気持ちでいっぱいだった。

その後、学会までだいたい月1回のペースで準備委員会が開かれ、学会に向けての準備が進められていった。斉藤さんと小澤さんの努力により、プレシンポの大まかな内容が決まった。二人からの打ち合わせの手紙で、私はとても励まされた。5月にはすでに、なんともうレジュメが出来上がっていた。そして委員会を重ねるごとに、話は盛り上がっていった。

このプレシンポ、係りとして一番心配だったのが、どれだけ人が集まるかということだった。プレシンポは大会の前日にあるので、クモ学会の会員でさえ、人数を把握することが難しい。このような企画は初めてだから、できるだけ多くの一般の人に聴きに来てほしい。そのためには、どのように宣伝するか考えなければならない。いろいろな案が出た。新聞社などにももちろん、宣伝を依頼した。その中の一つに、夕刊のコラムがきっかけになったものがある。桂あやめさんのクモについてのコラムだった。早速手紙を書く。なかなか返事が来なかったので、ドキドキした。「クモ仲間と行きます」とのこと。返事をもらったときはうれしかった。

いよいよプレシンポ！！イラストや写真などの展示物が所狭しと並び、廊下はちょっとした展覧会という感じだ。とても見応えがあった。各パネラーの話はとても興味深く、面白いものだった。聴きにきてくれた人も多く、無事終わったときはほっとした。

学会が終了してから、仕事でこのプレシンポの話をする機会があった。しばらくして、その話を聞いた子が、抹茶の缶にハエトリグモを捕まえて、持ってきてくれた。「育ててください」というメモを添えて。生憎私は飼育が苦手なので、あっさりと逃がしてやった。

それが悪かったからか、その後はクモを持ってきてくれない。個人的には、ウズグモを持ってきてくれたらうれしいのだが・・何かをきっかけに、クモに関心を持つ人が増えてほしいと思った。

広島県福山市と尾道市のクモ

新海明

少し古くなってしまったが、1992年の夏に広島県の福山市と尾道市を訪れる機会に恵まれて、クモ採集をすることができた。この時の記録は、どこにも発表しないままであった。最近になり、吉田真さんと日本各地のリストの充実の必要性を話し合い、大いに共感するところがあった。このことは東京のクモゼミでも話し合われており、すでに具体的な計画が実施されつつある。このような経緯から、手持ちの各地のリストで未発表のものを洗い直していたところ、6年前のこのリストに行き当たった。この調査は、滋賀大学の横山先生と当時その研究室に在籍されていた畑守さんとともに、クモタケの分布を調べる合間に書き留めたものであり、たいして注目すべき種類もなかった。しかし、どんなものも記録に残さなければ意味がないと考え、ここに報告することにした。

調査地 広島県福山市松永
調査日 1992年7月5日

キノボリトタテグモ	<i>Ummidia fragaria</i>	住居
ユウレイグモ	<i>Pholcus crypticolens</i>	F
オオヒメグモ	<i>Achaearanea tepidariorum</i>	F, e
ヒメグモ	<i>A. japonica</i>	y
チリイソウロウグモ	<i>Argyrodes fissifrons</i>	y
ヒラタグモ	<i>Uroctea compactilis</i>	y
ワキグロサツマノミダマシ	<i>Neoscona mellottei</i>	?
コガネグモ	<i>Argiope amoena</i>	F
ナガコガネグモ	<i>A. bruennichii</i>	y
ジョロウグモ	<i>Nephila clavata</i>	y
クサグモ	<i>Agelena limbata</i>	y
ササグモ	<i>Oxyopes sertatus</i>	F, M
キンイロエビグモ	<i>Philodromus auricomus</i>	f

調査地 広島県尾道市千光寺公園
調査日 1992年7月5日

キノボリトタテグモ	<i>Ummidia fragaria</i>	住居
アシプトヒメグモ	<i>Anelosimus crassipes</i>	F, y
ヒメグモ	<i>Achaearanea tepidariorum</i>	y
ゴミグモ	<i>Cyclosa octotuberculata</i>	F
ギンメッキゴミグモ	<i>C. argenteoalba</i>	y
ヒラタグモ	<i>Uroctea compactilis</i>	y
ジョロウグモ	<i>Nephila clavata</i>	y
クサグモ	<i>Agelena limbata</i>	e
コクサグモ	<i>A. opulenta</i>	y
コアシダカグモ	<i>Heteropoda forcipata</i>	脱皮殻

学名と配列は八木沼 (1986) にならった。

F: 雌成体、M: 雄成体、f: 雌亜成体、m: 雄亜成体、y: 幼体、e: 卵のう

ウズグモ研究事始め

渡部 健

私は、ウズグモ（正確にはカタハリウズグモ *Octonoba sybotides*）を対象として、大学院で研究をしています。といっても、研究を始めたのは1年半ほど前のことで、クモに関してははずぶの素人です。関西クモゼミに出入りして、あるいは、クモ学会で専門家の方々にいろいろとアドバイスをもらいながら、どうにかこうにか、研究の見通しがついてきたところです。しばらくクモの研究をしようと腹をくくったところで、自己紹介もかねて私の研究の様子を紹介したいと思います。

最初からウズグモを研究対象にしていたのでもありません。実際のところ、特に興味を引かれているクモがいたわけでもないので、大学構内の植物園をぶらぶらしては、目についたクモを書き留めたり、捕まえたアシナガグモにマーキングしたり、採集したクモを研究室で放し飼いにしたりと、あてどない調査とも呼べない日々が続きました。そんなある日、植物園から採集してきて、木の枝を入れた水槽内にほったらかしておいたウズグモが円網を張りました。名に違わず、網の轂（こしき）部にはウズ模様の白い帯がついていました。私にとっては、円網の美しい造形そのものが、すでに不思議だったのですが、意味不明のウズ模様にはことさら興味を引かれました。

しかし、本当に驚いたのは、ウズグモに餌としてガガンボやハエを与えた翌々日に、ウズ模様が消えて、かわりに直線帯がついていたのを見つけたときでした。「ウズグモなのに・・・!？」と、大急ぎで図鑑を開いてみると、これはすでに知られていることで、ウズグモはウズ模様あるいは直線模様の「隠れ帯」を着けると書いてあります。つまり、私が無知だっただけのことなのですが、なぜ2種類の模様をつけるのか？、そもそも、隠れ帯はなんのためにつけるのか？という疑問がうかびました。

とりあえず、これまでにどのような説明がされているのかを知るために、論文を読みあさった結果、誰もまだ結論を得ていない、ということを知りました。もちろん、仮説はいくつもありますが、現在でも同じ種を対象にした研究であるのに異なる仮説が支持される結果が報告されたりしています。つまりは、乱戦状態!!!これな

らば私のような素人にも参戦の余地があるかもしれないと、妙な元氣を持ちまして、「隠れ帯の謎を解き明かす」ことを、本気で私の研究テーマとするにいたったわけです。クモ学 100 年の謎 (?) なのですから、研究対象としては申し分ありません。

参考のため、これまでに考えられてきた「隠れ帯」の機能に関する仮説を古い順に並べると、(1) 網の張力を調整している、(2) 網を補強している、(3) 捕食者から身を隠す、(4) 網の存在を知らせて、大きな昆虫や鳥などに壊されないようにする、(5) 紫外線を反射して、餌となる昆虫を誘引している、(6) 腹部に蓄積できない過剰な絹糸成分を残置している、といったものがあります。このうち、(3)・(4)・(5)の説が、現在のところ有力な説としてしのぎを削っている状態です。

ちなみに、隠れ帯の機能については、おもにコガネグモ属(コガネグモ科)の種が具体的な研究対象とされてきたのですが、私が注目するのはまるで違う系統関係にあるカタハリウズグモ(ウズグモ科)です。ウズグモの隠れ帯について、私は(5)の説が妥当なのではないかと考え、いくつか支持する結果を得ました。しかし、紫外線反射で餌昆虫を引きつける効果があるとしても、なぜ2種類の模様が必要なのでしょう?この問題にずいぶん長い間悩まされていたのですが、最近ある仮説をたてるにいたりました。これから数回にわたって「くものいと」の場を借りて、簡単に説明していきたいと思います。

今回は、「事始め」ですでに長くなってしまったので、具体的な研究内容には深入りせずに、ウズグモの飼育方法を紹介して終わりたいと思います。私がウズグモを研究できたのも、冬季間に飼育個体で実験を続けられたからです。といっても、説明するまでもなく、ごく簡単に飼育できます(図1)。塩化ビニル性のパイプを輪切りにして容器の枠をつくり、内側面にウズグモが網を掛ける際の足場となるように、輪にした紙帯を差し込みます。水分を補給するため、シャーレに水を入れて容器の底に置きます。餌のカスや排泄物はシャーレが受け止めますので、ときどきシャーレを交換してやれば、衛生が保たれます。シャーレが交換できるように、容器の下面は閉じないでおきます。クモが逃げ出さないように、上面は透明なプラスチック板で覆います。パイプは直径が10cmあれば、成体が普通に網を張ってくれます(野外で見る最小サイズです)。飼育の難点は空間の確保と、餌の確保だと思いますが、上記のように、円

網をはるクモとしては、もっとも少ないスペースで飼育できるのがウズグモだといえるでしょう。さて、もう一方の難点である餌の確保ですが、シヨウジョウバエを飼うことで解決できます。2日置きに1匹与える程度で充分です。冷凍庫に5分くらい入れて、動きが鈍くなったシヨウジョウバエを網に乗せるのが簡単な方法です。この飼育システムで雄と雌を交尾させ、産卵・孵化までさせることが可能です。

円網を張るクモとしては、他には見られない飼育の容易さを活用してわかってきたことを、次回から順次紹介していきたいと思えます。あるいは、クモの隠れ帯について、その機能を看破している方があったら「くものいと」の次号がでるまでにご一報下さい。次回分の参考にさせていただきます！

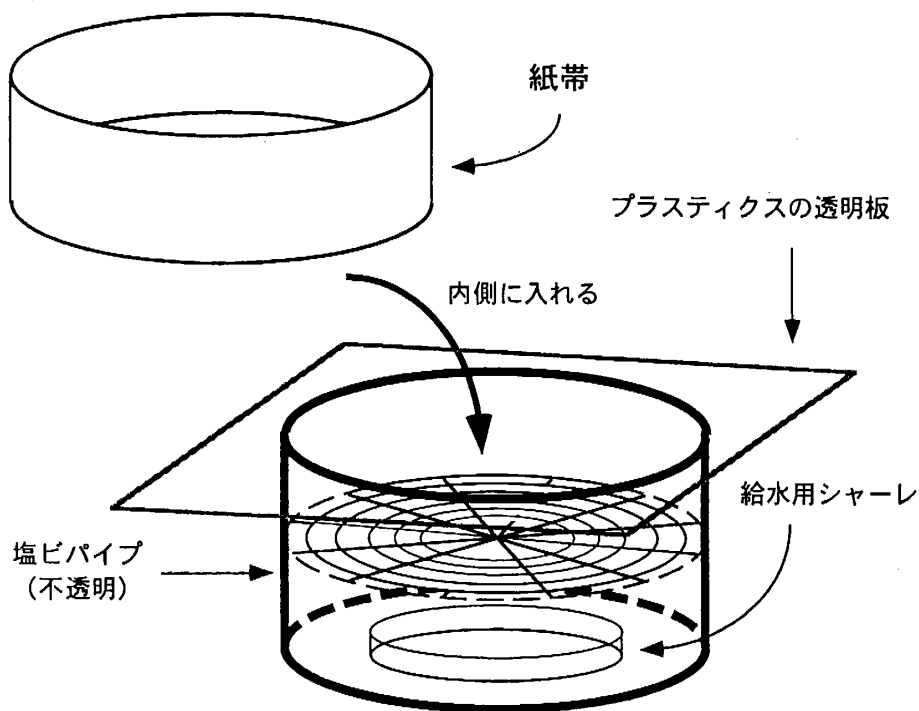


図1 ウズグモの飼育ケース。

編集後記

今回は原稿依頼を徹底したためか、たくさんの原稿が集まった。催促をしたものの、依頼した原稿がこんなに早く全部揃うとは思わなかった。年末に速達で郵送していただいた方もいる。1月2日に、わざわざ我が家まで来られ、郵便受けに投函された方もいる。これで私があほな原稿を書いて、会誌を水増ししなくとも済む。本当に有り難うございました。

原稿が早く集まったので、年明けに慌てて編集し、会誌を印刷した。実は私は、1月18日にドクター論文の公聴会を控えている。くものいと25号のために準備ができず、公聴会でいじめられたらどうしよう？まあ、何とかなるだろう（いつも、これだ!）。（Y）

〈関西クモ研究会〉

会長 山野忠清

編集 吉田 真

庶務 加村隆英

会計 牧野達也

顧問 西川喜朗

くものいと 25号

発行年月日 1999年1月10日

発行者 関西クモ研究会 (代表 山野忠清)

住 所 〒567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学 生物学研究室内

(西川研 TEL 0726-41-9555, 加村研 TEL 0726-41-9550)